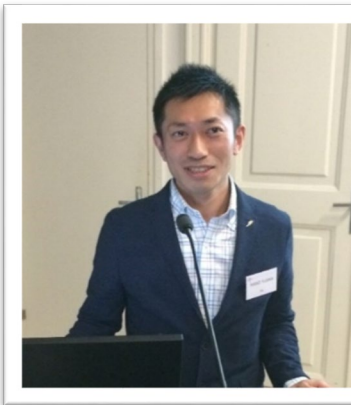
令和4年度　第3回城南区人権講座　　令和4年9月29日(木)

【講演テーマ】

『セクシュアリティと人権』



【講師】鳴門教育大学大学院　准教授　眞野（まの）　豊（ゆたか）さん

【講師プロフィール】
1981 年北海道生まれ。九州大学大学院地球社会統合科学府博士後期課程終了、博士(学術)。日本学術振興会特別研究員PDなどを経て、現在、鳴門教育大学大学院学校教育研究科　准教授。専門は社会学(ジェンダー、セクシュアリティ)。NPO法人CAP広島理事。主著に『多様な性の視点でつくる学校教育―セクシュアリティによる差別をなくすための学びへ』(松籟社、2020 年)。訳書に『王さまと王さま』(共訳、ポット出版、2015 年)、『ランスとロットのさがしもの』(共訳、ポット出版、2019 年)がある。

【講演要旨】

1. セクシュアリティと性の連続性

性(セクシュアリティ)を 4 つの視点で見ていくと
① 性的指向 ⇒性的な関心がどこに向くか(男性に惹かれるのか女性に惹かれるのか)
② 性自認　⇒自分の性は男性か女性か
③ 性表現　⇒服装、言葉遣い、立ち振る舞い、身のこなしなど
④ 身体の性的特徴 ⇒体つきのこと
と、なります。

これはすべての人が持つ権利＝人権です。どの性で生きるかとか誰と恋愛するかとかを決めるのは本人です。また、世の中は、男と女という風にスパッと切り替わるものではなく、グラデーションになっています。

2. セクシュアリティによる差別の実態

性的少数者の約６割は学校でのいじめを経験しています。学年が上がるにつれて割合は高くなり、ピークは中学校 2 年生です。いじめに遭うと不登校となり、高校進学を諦めてしまう人が多くいます。セクシュアリティによる差別は学びの機会そのものを奪っている……これは大変な問題です。

3. 私のライフストーリー

学校で一番楽しかったのは、女の子とおしゃべりしている休み時間でした。低学年の頃は何も問題なかったのですが、中高学年になると「ホモだ、オカマだ」と言われるようになりました。

一生懸命、否定していたけれど、小学校 5 年生の時、同性の子を好きになりました。、自分はみんなが言う通り、ホモでオカマなんだと自覚をしました。そして、自分には生きる価値がないと思ったし、恥ずかしい存在だと思いました。そのころから人生の目標は死ぬことになりました。

中学から高校の頃は異性愛者のふりをして、自己否定していました。友達を作らなくなりました。
また、歩き方やしゃべり方、物の持ち方などにも神経過敏となり、教室は夢や希望の持てる空間ではありませんでした。学校や先生も大嫌いでした。暗黒の中学・高校時代でした。ストレスから 24 時間緊張状態で生きた心地がしなかったです。
でもある時、私は学校の先生になりたいと思い出しました。自分みたいに学ぶことを楽しむことができない、ただ耐えることしかできない、そんな子どもに教師が気付けないなら、自分が学校改革すればいいという夢を抱き始めました。ただ、24 時間緊張状態で勉強に集中することもできず、ストレスにつぶされそうな毎日でした。
高校２年の時、NHKでチャイルドラインの相談を知りました。電話の相手に初めてカミングアウトしました。その時やっとそれまで自分ひとりで抱えてきた重荷が外れました。何か問題解決したわけではないけれど、話を聴いてもらえた、否定されなかった。それで勉強頑張ろうって思えました。
大学に入って性的少数者のパレード、レインボーマーチ札幌に参加したことが転機となりました。ここで初めて私は、自分と同じような人が沢山いるということを知りました。そして、これは個人の問題じゃなく、社会の問題なのではと意識が変わり、大学院に行ってゲイの差別について研究をするようになりました。

4. 性の多様性を認める社会に

文科省は通知を出し、髪型・服装・トイレ…等、性的少数者への個別の対応をするように求めています。でもこれだけでは不十分です。
以前、勤務していた中学校にいたトランスジェンダーのAさんの話をします。
Ａさんは中１の時にレズビアンの親友を失ってから不登校になってしまい、適応指導教室に通っていました。自分は生きてちゃいけないんだとリストカットをしていました。完全に誤った自己認識です。私は自身の経験を話して相談にのったり、参考になる本を貸したりしました。Aさんは人間関係を再構築していき、教室に入れる回数がどんどん増えましたが、ある時、事件が起きました。教室で男子生徒がふざけあって、ゲイという言葉を使って、からかい合いをやっていたそうです。その様子を見た Ａ さんは怒りがこみ上げそのまま早退してしまいました。Aさんは中１の時、差別で親友を失って、そういう何気ない言葉が人の命を奪うということを知っているから許せなかったのです。
当事者に個別対応してしっかりサポートしただけでは問題解決にはなりません。問題は本人にあるのではなく、周りにあるからです。性的マイノリティを否定する言葉が周りになくならない限り、問題は何も解決しません。学校のみならず、保護者や地域、職場で性の多様性を前提とした環境づくりを進めるとともに、理解を育んでほしいと思います。